



Vol.26

ゆうことみゆきのふくふくトーク ソノコ de ソノコ

アイヌ文化にどっぷり浸って生きてきた
本田優子(札幌大学副学長)と
村木美幸(アイヌ民族博物館専務理事)が、
その魅力をソノコ(=お便り)形式で
語り合います。

イラスト/安田千夏

スルク(トリカブト)



山菜採りを楽しむ季節ですが、注意しなくちゃいけないのが山菜と間違えやすい有毒の植物だよ。中でも、命を落とす事故につながるのが猛毒のトリカブト。

トリカブトは全草が毒なので要注意。芽出しの頃がブクサキナ(ニンソウ)とよく似ていて、同じような所に生えているので見分けがつかないことも。六月以降にもなると茎も伸びるし、紫色の花が咲いたら間違うこともないんだけどね。なので、ブクサキナを採るのは花が咲いてから採るといいんだって。トリカブトのアイヌ語名はスルクですが、根を矢毒に利用するので、毒もスルクと呼ばれるの。かつて、毒の調査は家々の秘伝で、毒の強弱も狩猟法によって調整してい

たそうで、例えば、クマ猟では、通り道に仕掛けるクワリと呼ぶ仕掛弓の矢毒に強い毒を使うんだって。矢が命中してから倒れるまでの時間が長いと遠くまで逃げる可能性もあり、発見が難しくなるからみたい。また、弓矢を使っておこなう春先のクマ猟は、逃げて雪上に残る足跡や狩猟犬を連れていくので見つけやすいことから、強い強い毒は使わなくても良かったんだって。

矢毒にはトリカブトのほかに、コウライテンナンショウの根茎やドクゼリ、動物の胆等も混ぜてつくられたんだそうですが、どれも効き目がありそうだよ。

優子さん、何かトリカブトについてのエピソードってありますか？



私が所属する札幌大学には、「大学の森」と呼ばれる小さな森があるの。そこには、アイヌ文化を学ぶ上で重要な植物がいっぱい生えているので、毎年一回は授業の中で学生たちと野外学習をします。トリカブトの見分け方も重要な学習ポイント。

ある時、「これがスルク、トリカブト。ほら、ひよろつと伸びたヨモギみたいだよ」と言ったら、

一人の学生が息をのんだの。「これ、私のゼミの先生、ヨモギだって言って採ってた。お風呂に入れるって...」「うっそお!!」

最も毒性の強いオクトリカブトではないにせよ、かなりヤバイことになるはず...。幸い、今に至るまで入浴中の変死事件は耳にしないので、「恐怖のヨモギ湯」は実行されなかったのでしょうね。

ところで、トリカブトは、北海道では大学構内にすら普通に生えているけど、本州の平地ではまずお目にかかれない植物。でも、兄が植物の研究をしていたこともあり、金沢の実家の庭には、山から掘って来たトリカブトが植えられてたの。美しい紫の花に顔を近づけ、「猛毒...」と見入ってた私は、かなりアブナイ少女だったかも(笑)。

もう三十年近く前、トリカブトを使った保険金殺人事件があり、一気に知名度があがったよね。その影響か、トリカブト中心事件も起こったりしたの。でも、間違ってもトリカブトで自殺しようなんて考えないこと！

だって、呼吸困難のうえに臓は動かさず、想像を絶する苦しさに悶え絶えず、最後の最後まで意識はあるんですって。くれぐれもご用心！



スルク(トリカブト) 8月頃開花

ブクサキナ(ニンソウ) 5月頃開花

■本田優子(ほんだゆうこ):金沢市生まれ。札幌大学副学長。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。
■村木美幸(むらきみゆき):白老町生まれ。アイヌ民族博物館専務理事。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。
■安田千夏(やすだちか):神戸市生まれ。元アイヌ民族博物館学芸員。現在は同館でアイヌ若手育成事業の自然講座講師を務める。